

体験から思いを伝える

郡山市立喜久田中学校教諭 鈴木 庸一

1 「話すこと・聞くこと」の指導にあたって

「話すこと・聞くこと」を指導するにあたって、最初に頭をよぎったのは、はたして私自身が「話すこと・聞くこと」の十分な指導を受けてきたのだろうかという疑問である。その答えは明らかであり、日常生活の中で無意識に「話すこと・聞くこと」を学び、経験で覚えてきたといえよう。だから、その習得には言語環境によるところが大きく、一朝一夕に身につくものではない。このことは、指導の難しさであると同時に指導に対する不安をも意味する。何をどのように指導していくかということが大切である。自身の「話す力」をもう一度見つめながら指導にあたることにした。

3 具体的な実践内容

生徒の実態を踏まえ「話すこと・聞くこと」の基礎的・基本的な力を身につけさせ、豊かな表現力を養うために次の二点を考えた。

- ① 言葉で伝えるスキルを学ぶこと。
- ② 言葉で伝えたいという思いを育てること。

①の「言葉で伝えるスキル」については、主に説明や発表を中心とした音声言語活動を取り入れ、伝える相手を意識した表現活動とそれを聞く姿勢と力を育てる工夫をすること、また明瞭な発音・発声、速度、間の取り方などの基礎的・基本的技術の訓練を行うことに重点を置きたいと考えた。

②の「言葉で伝えたいという思い」を育てることについては、自分の考えや意見をはっきりもたせる工夫とその考えが価値あるものであることを認識させる工夫を図りたいと考えた。

以上の二点について指導するために、生徒の体験活動と国語科の授業を意図的に関連づけて、体験からの思いを自分の言葉で表現しようとする場を設定することにした。そして授業で学習したことが他の場面で活用できれば、よりよく表現しようとする態度や授業への興味・

2 生徒の実態から

本校に赴任した四月、最初の授業で自己紹介をしてもらったが、今ひとつ盛り上がりがない。自分をアピールしたいという思いが伝わってこない。なぜだろうと思いがらも「話すこと」に関する意識調査をした。その結果、「話すこと」を苦手に行っている生徒が八割を占めた。その主な理由として

- ① 話すことがうまくとめられない。(めんどうくさい。)
- ② 話すことはあるが内容に自信がもてない。
- ③ どのように話したらよいのかわからない。
- ④ 聞き手がどう受け止めているのかわからない。

また、グループなどでの話し合い活動については、①決まった人ばかり話している。
②意見が出なかったり、自分の考えがまとまらない。
③感情的になってしまいうことが多い。
④聞いていることが多く、つまらない。

そこで、単元の学習の中に音声言語活動を多く取り入れ、「話し方」や「話し合いの仕方」を身につけさせ、人前で話すことに慣れさせたいと考えた。

関心も高まると考えた。

具体的には、スピーチを通して「話し方」の条件(モデル)について話し合い、よりよい「話し方」について考えさせる。そして、グループなどでの「話し合いの仕方」についても確認する。また、総合的な学習との関連から学習旅行で自分のテーマについて調べたことや職場体験を通して学んだことをポスターセッション形式で発表させる。同学年だけではなく、他学年の生徒にも発表を聞いてもらうよう配慮した。

話し合いの仕方

問題を解決するために話し合いをすることがあります。このときに大切なことは、自分の考えを相手に伝えること、また相手の考えを自分が正確に理解することです。これにより、全体の意見や考えが深まり、まとまってきます。では、話し合いの仕方について、しっかり学習してみましょう。

話し合いの仕方の順序

1. 話し合いの前に

- (1) 司会者・記録者の選出
- (2) ルールの確認

① 話し合いの順序(司会の仕方)

- 司会者が話し合いの進め方をしっかりと理解しておく必要があります。「これからの議題は何であるのか」「どのような順序で話し合いを進めていくのか」などを確認しなければなりません。

② 意見の発表の仕方

- 自分の考えをよくまとめてから挙手をし、発表すること。
- 相手がよく聞き取れるように大きな声でゆっくりと話すこと。
- 相手の意見を最後まで聞いてから話すこと。(途中で割り込まないこと)

③ 相手の意見の聞き方

- 自分の意見と異なるときでも最後までしっかり聞くこと。
- 周囲の人との私語はしないこと。

4 指導の実際

二年 第一単元「春を伝える」

●「春」という言葉からイメージを膨らませ、自分の体験を踏まえてスピーチすることにした。スピーチの後、意見交換により、「話し方」の条件（モデル）についてまとめる。

I 「春」という言葉から連想するものをノートに書き出す。その中から体験があり、印象深いものを一つ選びカードに書き出す。自分らしさが表現できるように文章に書き、スピーチする。

○体験を踏まえることで、自分の意見をもたせ、思いが伝えられるようにする。

II 一人のスピーチ後、感想を発表する。全員終了後、自分の印象に残ったものについて、その理由を話し合う。

○同じテーマであるので、良いスピーチのモデルがわかる。

生徒が印象に残って良いスピーチだと考えた理由としては、

A 意見（主張）は最初にあるほうがわかりやすく
 だよ。

二年 第三単元「心のきずなをとらえる」

～「ゼブラ」から～

●ウィルスンさんとの触れ合いを通して、ゼブラがどのように変わったか、また、なぜ変わったのかを自分の体験を踏まえて発表する。

（教科書138ページの課題から）

学習の進め方は、「伝え合い」に同じ。

イ 体験は具体的に話すほうがよい。

ウ 話の切り出し方が工夫されている。

エ 声の大きさ、速さの工夫がされている。

また、朗読が上手な生徒が必ずしもスピーチがわかりやすいとは限らないという意見も出た。

そこから、スピーチの仕方の「モデル」として、構成法と話し方についての工夫点を決めた。

二年 第二単元「世界に目を向ける」

～「伝え合い」から～

●「言葉による伝え合いの難しさ」について、日常生活の中で「共通の言葉」で話しているのに誤解が生じた経験をあげて思いをふくらませ、スピーチする。

（教科書47ページの課題から）

第一単元の話し合いから、構想メモをもとにスピーチ原稿を作成した。発表はグループで行い、その中で生徒が選んだ良いものを全体で発表させた。「構成」や「話し方」については自己評価を行った。また、相互評価により自分の考えが価値あるものであることに気づくよう工夫した。

総合的な学習との関連

体験から自分の思いを伝える場を二度設定した。

① 学習旅行で自分のテーマについて調べたこと。

② 職場体験を通して学んだこと。

発表は、ポスターセッション形式とした。二回目は、一学年の生徒も対象に行った。回を重ねるごとに、生徒が自信をもって発表する姿が見られた。



スピーチや発表の準備、相互評価については、授業だけでは時間の確保が難しく、生徒の負担が大きかったように思える。ただ、人前で話す経験を多く積み、場慣れすることで生徒たちは、その楽しさと同時に「伝えること」の難しさを少しずつ感じはじめてきている。今後、さらに指導の内容を明確にし、三年間の見通しをもった指導を重ねていく大切さを実感している。